

日経 H26. 12. 27

文化

「語る」「聴く」哲学広がる

被災地や看護・介護の現場へ

哲学者が現場に出向き悩みを抱える人々と対話をする——。哲学者で大谷大学教授の鷺田清一氏によって提唱された「臨床哲学」が広がりを見せている。様々な立場の人々が集まって東日本大震災をテーマに対話を重ねたり、介護や看護の現場でいかに高齢者や患者に向き合うのかを問い直したり。日々の生活の中で哲学という学問を使っていこうとする試みだ。



「震災とメディア技術」をテーマに開かれたつがくカフェ（11月30日、仙台市）

「震災とメディア技術」をテーマに開かれたつがくカフェ（11月30日、仙台市）

「関東の家族に震災の出来事を伝えたとき、自分自身もメディアになるんだなあと感じました」

「石巻（日日新聞）の壁新聞はすごく温かく感じた。メディアはハイテクなものばかりではありません」

討論で感じ取る

11月30日、仙台市のせんだいメディアテークで開かれた第39回「考えるテーブル てつがくカフェ」。30人ほどの参加者がテーマである「震災とメディア技術」に関して様々な意見を述べ合う。

「（話題が様々に展開する）ライブ感は大事ですが、キーワードは共有したいと思います」と司会役の西村高宏・東北文化学園大学教授（臨床哲学）が促すと、「メディアは姿形を与える」「暴力性と断片」「やさしいメディア」といった声があがる。

特に結論は出さない。2時間ほどの討議を通じて、それぞれが感じたことを持ち帰って自ら考える仕組みだ。

哲学カフェは22年前、フランスの哲学者マルク・ソーテが始めた市民参加型の公開討論会で、まもなく日本でも開かれるようになった。仙台のてつがくカフェは東日本大震災から3カ月後の2011年6月、西村氏らが中心となって始まった。

「当初は震災を語ることで自体を負い目を感じる人が多かったので、第2回はそのことをテーマにしました。支援には様々な形があるという考え方が広まったのではないのでしょうか」と西村氏は手応えを感じている。今年21日には「震災と読書」をテーマとする第40回が開かれた。

11月28～30日、東京・墨田のアサヒ・アートスクエアでダンス公演「とつとつダンス p a r t . 2 愛のレッスン」があった。ダンサーで振付師の砂連尾（じゃれお）理氏と70代の車いすの女性、岡田邦子さんによるもので、2人が会話するようにゆっくりと体を動かすのが特徴。10月の大阪に続く公演であり、来年1月24、25日にはせんだいメディアテークで開かれる。

伝え方を模索

砂連尾氏は09年から京都府舞鶴市の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で、入居する高齢者や職員、一般市民を対象とするダンスのワークショップを開いてきた。そこに10年から加わったのが西川勝・大阪大学特任教授（臨床哲学）で、介護の仕事とは何かなどを問う「とつとつ勉強会」を手がける。

「ダンサー同士なら伝わる言葉が介護の現場では伝わらない。西川さんが入ることで（身体と言葉の問題などを）考える道筋が示されるように思う」と砂連尾氏を見る。その上で「介護にあたっては、目の前の身体にきちんと向き合う必要がある。ではどうすれば良いのかとなるとすぐには答えが出ないが、考えていく必要はある」と話す。

今年6月に「看護師たちの現象学」（青土社）という本を出した西村ユミ・首都大学東京教授（看護学）は臨床哲学の研究者でもある。著書では東海地方の急性期医療を担う総

合病院での6年間に及ぶフィールドワーク（現地調査）や師長、係長、新人看護師などへのインタビューを通じて、看護という協働の現場がいかに行われているかを描いている。

「病棟では一人の患者に対して複数の看護師が関わっており、そこでは仕事に優先順位を決めたり、特定の患者の状態に注意を向けたり、といったことがなされている。その知恵は『暗黙知』という言葉で呼ばれることが多いが、具体的にどういった実践がなされているのかが知りたかった」と西村氏は話す。

研究の出発点は「身体は主体と客体の両面を持つ」ととらえたフランスの哲学者、メルロ＝ポンティの現象学にある。西村氏は大学卒業後、看護師としていわゆる植物状態の患者にかかわったとき、外からの働きかけによって患者の状態が変わるように見えた。それが看護学と現象学を結びつけるきっかけとなった。

臨床哲学は鷺田清一氏が大阪大学教授だった1998年、それまでの倫理学講座の看板を付け替えたのが始まり。「逃げ場をなくしたわけです。臨床哲学は研究室にいたのでは成立しない。出て行ってそこの言葉で哲学をする必要があります」と鷺田氏。その上で「いろいろなところでタネがまかれている」と臨床哲学の広がりを喜ぶ。

鷺田氏は今年9月刊行の「哲学の使い方」（岩波新書）で「答えがまだ出ていないという無呼吸の状態にできるだけ長く持ち堪（こた）えるような知的耐性を身につける」大切さを指摘する。先が見えにくい時代だからこそ、対話を重ねながら、深く強く考えることが求められているようだ。

（編集委員 中野稔）